COVID-19 のパンデミックと超過死亡

COVID-19 pandemic and excess mortality

鈴木　基（国立感染症研究所）

Motoi Suzuki （National Institute of Infectious Diseases）

mosuzuki@niid.go.jp

超過死亡とは、ある時点における期待される死亡数と観察された死亡数の差として定義される数値であり、公衆衛生的な指標としての意義は、パンデミックや災害、紛争といった、ある時点を境に始まったイベントが死亡に及ぼすインパクトを測定することにある。その分析手法と活用の起源は、米国の統計学者 Selwin D. Collins が行った「スペイン風邪」（1918-19）流行時の死亡統計分析に遡ることができる。

2020 年初頭から始まった COVID-19 のパンデミックでは、当初から各国の超過死亡の動向に国際的な関心が集まった。その理由は、パンデミックの公衆衛生的インパクトを評価するに際して、診断されていない COVID-19 を原因とする死亡に加えて、医療のひっ迫や公衆衛生的・社会的対策（public health and social measures）に伴う COVID-19 を直接原因としない死亡の発生を把握する必要が生じたことにあった。

従来、我が国では、国立感染症研究所において季節性インフルエンザの流行に伴って発生する超過死亡を迅速推定するシステムが運用されていた。しかし、一部の政令指定都市からの任意報告に基づくものであり、また冬期限定の運用であったことから、その精度には制約があった。そのため 2020 年後半に立ち上がった厚生労働省研究班（「新型コロナウイルス感染症等の感染症サーベイランス体制の抜本的拡充に向けた人材育成と感染症疫学的手法の開発研究」）の分担研究課題として、人口動態統計に基づく全国の全死亡及び死因別の超過死亡を推定するシステムが構築された。

以来、超過死亡の推定値の解釈を巡っては、各種メディア、公的会議、国会質疑等の様々な場面で議論が繰り広げられている。しかし、その全てが有意義なものになっているとは言い難い。科学的分析に基づくとは言えない独断的な解釈も見受けられ、個人的な主義主張の道具として利用されている場合もある。一方で解釈を加えることに過度に慎重となり、ほとんど解明することが不可能な数値として扱われている場合もある。

こうした問題が生ずる要因の一つとして、超過死亡の統計学的な意味、公衆衛生的な指標としての意義、社会的なコミュニケーションの手段としての役割について、研究者の間でも明確なコンセンサスが確立されていないことが挙げられるだろう。超過死亡の研究の歴史は半世紀以上に及ぶが、かつてこれほどまでに社会的に注目されたことはなかったのであり、そこに研究者の興味と社会的ニーズとの間にギャップがあったことは否定できない。これを如何にして埋めていくかが今後の課題である。

本報告では、COVID-19 パンデミックの経緯を振り返りながら、公衆衛生対策の観点から超過死亡の指標としての意義とコミュニケーション上の課題について検討するとともに、わが国における死亡統計の制度上の課題についても述べる。